

# 人言・猫言

猫に学ぶ、ことわざ・名言・四字熟語〈一〉

写真・文／常瀬村泰



Love & Peace!  
巻頭言

学は道にいたる門なり。

柳生宗矩 (1571-1646)  
「兵法家伝書」



Love & Peace!

柳生宗矩<sup>ひらの</sup>は、江戸時代初期の剣術家である。没落した柳生家の跡取りだったが、やがて徳川家康に見出され、將軍家の剣術師範となる。のちに幕府の総目付となるが、これは諜報活動を担ういわばスパイの総元締めのような役目で、そのせいか時代劇などでは悪役として描かれることも多い。

「学は道にいたる門なり」——一六三二年に彼が著した『兵法家伝書』の中にあるこの言葉は、後にこんな文章が続く。「此門<sup>この</sup>をとをりて道<sup>ちのち</sup>にいたる也<sup>なり</sup>。しかれば学は門也、家にあらず。門を見て家也とおもふ事なかれ。家は門をとをり過ぎて、おくにある物也」

私たちは学ぶことや知識を得ることを、さも「目的」のように捉えがちだけれど、それはあくまでも「手段」に過ぎない。たとえば外国語を学んだり話したりするのは決して「目的」たりえないが、あたかもそれそのものを目標とする人が多いのは、不思議なことだ。「手段」を「目的」と錯覚するのは、さながら「門を見て家と思う」ようなものなのだろう。



この世で最も強い人間は、  
孤独の中でただひとり立つ人間だ。



イプセン（一八二八—一九〇六）『民衆の敵』  
ノルウェーの劇作家



Love & Peace!

山口県東南部、周防灘すおうたなに浮かぶ周囲十二キロ余りの祝島いわいしまを訪ねた時のことだ。夕刻、宿を出て島の北東部の海岸線をぶらぶらと歩いていたら、一匹の白猫がいた。

白猫というにはあまりにも汚れていて、私は最初、使い古しのモップでも捨てられているのかと思った。彼はテトラポットの上にくすぐまり、海の方に顔を向けて、じっと動かなかった。ゆっくと近づいていき、並ぶように腰を下ろして見ると、まるで潮騒に耳を傾けているような顔つきだった。邪魔をしないよう静かに写真を撮り、それからふたりで海を眺めた。

湿気の多い波打ち際である。仲間はおらず、餌などありつけそうにもない場所だ。ちよつと北に行けば漁港があるし、西に行けば集落もある。実際その辺りにはたくさん猫がいて、鳥の人々と絶妙の距離を保ちながらのんびり暮らしている。

何もこんな場所にいることはないだろうに、と私は呟いた。

だけど、どうやら彼はここが気に入っているらしい。ごわごわの毛並みを波風にそよがせながら、いつもここで海を眺めているらしい。

強いな、と思った。

翌日、同じ場所に行ってみたら、やっぱり彼はそこにいた。枕代わりなのか、ワンカップ大関の空き瓶を抱え込むような姿勢で、やっぱり海を眺めていた。

寒さにふるえた者ほど  
太陽の暖かさを感じる

ウォルト・ホイットマン (一八一九―一八九二) 『草の葉』 詩人 (アメリカ)





Love & Peace!

中国山地の山あい、鳥根県と広島県の県境に位置する美郷町を訪ねた時のことである。野生鳥獣による農作物や森林への被害対策に取り組む行政担当のキーマンが、こんなことを言っていた。

「手うちわを始め、その次に扇風機を入れる。クーラーは最後の最後」

とかく補助金などに頼りがちな町起こしを、いかに住民主体で取り組むか——という話題の時に発言された。「手うちわ」という響きが良いなと思った。

つまり、いかなる町起こしも最初は自分たちの手弁当で始め、地方自治体の助成などは（必要であれば）その後受ける。国からの補助金には最後まで頼るべきではない——ということをし、「うちわ」「扇風機」「クーラー」に喩えたものである。

何もこれは補助金に限った話ではないだろう。苦勞というものは、せずに済むならそれに越したことはないけれど、しかしすればそれだけ得るものも大きい（と信じた）。

「うちの風の涼しさを知っていればこそ、扇風機の有り難みがわかるといいうものです。最初からクーラーのある環境にいる人は、ろくなことがありません」

市井の哲人はそう言った。なるほどと首肯しつつ、私はふと、ウォルト・ホイットマンのこんな言葉を思い出していた。

「寒さにふるえた者ほど、太陽の暖かさを感じる」

アメリカ最大の詩人と称される人は、続けてこうも述べている。

「人生の悩みをくぐった者ほど、生命の尊さを知る」



春は空からそうして土から  
かすかに動く



長塚節 (一八七九—一九一五) 『土』 歌人 (日本)



Love & Peace!

この言葉は、筆者よりも地方都市や農山漁村に暮らしていらっしやる本誌読者の方々のほうが、はるかに実感されるところが多いのではないだろうか。

アスファルトが敷き詰められ、高層ビルが林立する都市空間に暮らす者にとって、空に季節を感じることは時折あっても、土から動く春を感じられることは、あまりない。

筆者も、そうである。

ところが先日、思いがけず間近なところで、土と出会った。近所のガソリンスタンドが倒産し、更地になった場所を何気なく通りがかった時のことである。

分厚いアスファルトがひっぺがされたそこに、褐色の土が露出していた。

やや大仰な言い方をすれば、その光景は、ちょっとした衝撃だった。

自分も含めて都市に住む人間はみな、アスファルトを塗り重ねた上に寝起きしている。いま立っているコンクリートの地面の下に、有機質成分に満ちた土壌があるという、そんな当たり前のことを、明確に認識している人は少ないだろう。

筆者もまた、工事現場に露呈した褐色を見て、初めてその事実を教えられた気がした。

一見、分厚く幾重にも塗り重なっているかのごときアスファルトやコンクリートは、

実はものすごく薄っぺらい代物で、一枚べろりとめくってしまえば、その下には土がある。種を蒔けば植物が育つ、豊穣の大地がある。

地球という母なる惑星の、地肌がある。

季節の移り変わりを大気の巡りとするならば、それは宇宙につながる営みだ。

だからこそ春は空に現れ、そうしてこの惑星の地表に降りてきて、土に作用する。

春は空から そうして土から かすかに動く

今年もまた、種を蒔く季節がやってきた。



決定をあせってはならない。  
一晩眠ればよい知恵が出る。

プーシキン (1799 - 1837)  
(作家 / ロシア)



Love & Peace!

先日、同世代のとある知人と話していて、非常に素晴らしい言葉を聴いた。

「何か重大なことを決定する時、私はたくさん眠って、美味しいものをいっぱい食べて、お日様が真上にある時間帯に考えようって決めているんです」

何とこれは素晴らしい名言だ、と思った。

僕たちが何事か思い悩む時というのは、大概ご飯もろくに喉を通らず、深夜に悶々とした揚げ句、重大な結論を出そうとしがちである。けれどもそうして出てきた答えは、ほとんどの場合、悲壮にして悲観的、ろくなものがない。

冷静に、客観的に状況を判断するためには、美味しい食事と十分な睡眠、そしてお天道様が必須。

何事も「決定をあせってはならない。一晩眠ればよい知恵が出る」と信じたいものである。

ちなみに、これとはちょっと違うけれど、最近どうしようもなく腹に据えかねるコトやヒトに遭遇した時、僕はこんな言葉を何遍も心の中で唱えるようにしている。

「腹が立ったら、何か言ったりしたりする前に十まで数えよ。それでも怒りがおさまらなかつたら百まで数えよ。それでもダメなら千まで数えよ」(ジェファアソン)。

結局のところ、いつだって「怒りは無謀をもって始まり、後悔をもって終わる」(ピタゴラス)ものだから。

Love & Peace! 巻頭言



逆風に向かって飛べ

白川静 (1910 - 2006)  
(漢文学者 / 日本)



Love & Peace!

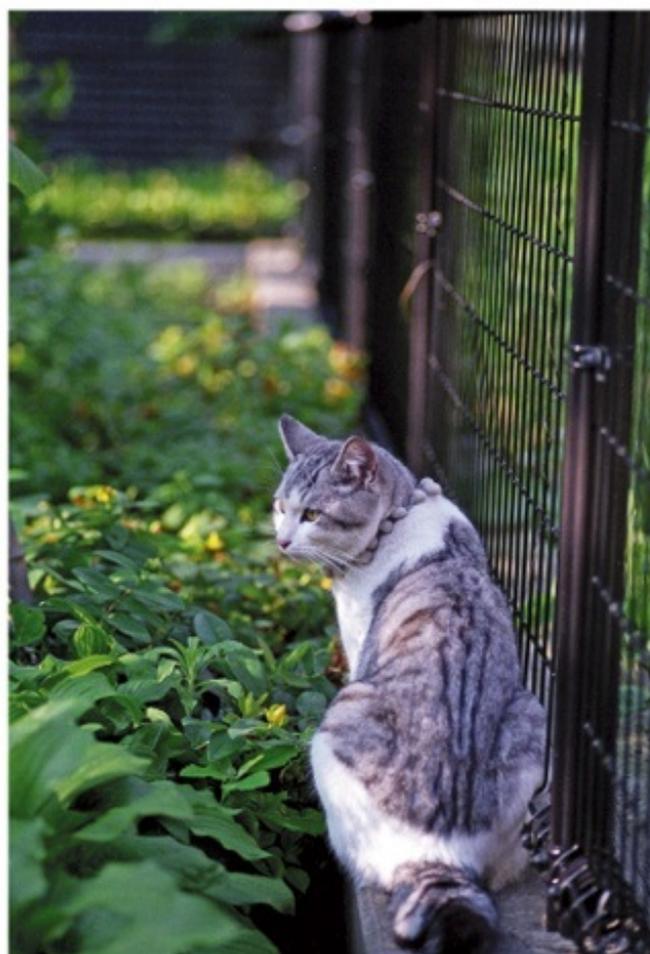
破天荒な哲学者にして大阪大学の現総長である鷺田清一氏にお会いした時のこと。「尊敬する学者はいますか」と訊ねたら、白川静氏の名前を挙げられた。臨床哲学を専攻する鷺田氏から出てくる名前としては、意外な人物だった。「学者馬鹿」の人生を送られた数少ない学者だから——と鷺田氏はおっしゃっていた。

漢文学者の白川静氏は、学者としてはいわゆる「遅咲き」だった。漢字、漢文学をめぐる氏の洞察力は、洞窟のように深く地下水脈のように途切れることがなかったといわれるが、氏が世間一般から評価を受けるのは、晩年になってからのことである。

若い頃から「読書をして一生を送りきりたい」と切望したという白川氏が、そんな自らの境遇を悲観していたかどうかは知らないが、「逆風に向かって飛べ」というこの言葉には、たとえ理解や賛同、評価などが得られない状況下であろうと、何度でも挑戦し続けようと自らを鼓舞する、強い気概が感じられる。

なるほど確かに「飛躍」は、追い風よりも向かい風の方がより高く舞い上がるこ  
とができるものだ。その分、助走はひどく大変だけれど、臆せず、屈することなく、  
幾つになっても飛ぶ夢を見続けていたものである。

Love & Peace! 巻頭言



正しく見るためには二度見よ。  
美しく見るためには一度しか見るな。

アミエル (1821 - 1881)  
(思想家/スイス)



Love &amp; Peace!

ベストショットは出会いの一枚か、それとも去り際か——写真家の方々と、そんな議論になったことがある。

初対面の一枚目というのは、相手もこちらも肩に力が入ってぎこちなく、自然になれない。一方で、去り際というのはたくさん撮り尽くした最後のカットだけに、相手も打ち解けて自然な表情が撮れる——そんな意見が多かった。実際、そうなのかもしれない。

しかしこと自分に関していえば、逆のケースが多い。フィルムの一ロール目、それも前半部分が圧倒的に良かったりする。デジタルカメラでの仕事が多くなってからは、特にそう感じる人が多い。デジカメという代物は、ご存知の通り撮影した直後からその場で画像を視認できる。これが便利なようで、存外そうでもない。

「うーん、構図をちよつと右にずらしたほうがいいかな」、「露出はもう少しプラス気味か」、「ワンポイントで花なんか入ると色彩があつていいかも」——なんてやり始めると、ろくなことがない。モニターを見ては修正を施し、さんざん撮り直した揚げ句に、一番良かったのは何も考えずに撮った最初の一枚目——なんてことは、呆れるくらいに多くある。つまり、「あ」と思つてカメラを向けた瞬間に写真は始まり、そして同時にそこで終わる。「見る」というのは、そういうことなのかもしれない。

正しく見るためには二度見よ。

美しく見るためには一度しか見るな。

フランスの思想家・アミエルは、そう言った。

世間一般で「正しい」とされる事柄に対して、どうにも懐疑的な性分である僕は、物事を「正しく」見ようとする努力は、あまりしない。むしろその「美しさ」こそ、きちんと見たいといつも願う。

「正しいこと」などというのは、世につれ人につれ、とかく変節するものだけれど、「美」というものは、きつと、そうそう変わるものではないと思うのだ。

Love & Peace! 巻頭言



なすべき仕事をたくさん持っていない限り  
怠惰を楽しむことはできない。

ジェローム (1859 - 1927)  
(作家 / イギリス)



Love & Peace!

夏休みも終わり、憂鬱な面持ちで学校や職場に向かう人も多いことだろう。かくいう筆者も、その例外ではない。しかし、もしもあなたが「生涯ずっと夏休みです」と言われたならば、それは果たして幸福なことだろうか。生活していくに困らない金銭を与えられ、「あとは何もしなくてよろしい」ということになった時、人はそれを永続的に喜べるものだろうか。

恐らく、否。どんなに豪勢なご馳走も、ほんの時たま口にできるからこそ美味しいのであって、年中豪華なものばかり食べていたら、有り難みなど吹っ飛んでしまうものだ。

結局のところ、人は「なすべき仕事をたくさん持っていない限り、怠情を楽しむことができない」生き物なのだと思う。「人を偉大にするものはすべて労働によって得られる」と、イギリスのモラリストであるスマイルズ（一八一二～一九〇四）も、「自助論」の中でそう述べている。

  
Love & Peace! 巻頭言



人は後ろ姿について全く無意識だ。  
そして何げなくそこに全自己をあらわすものだ。

亀井勝一郎 (1907 - 1966)  
(評論家 / 日本)



Love & Peace!

「あなたのこの一〇年間で、何か有意義だったことってあった？」

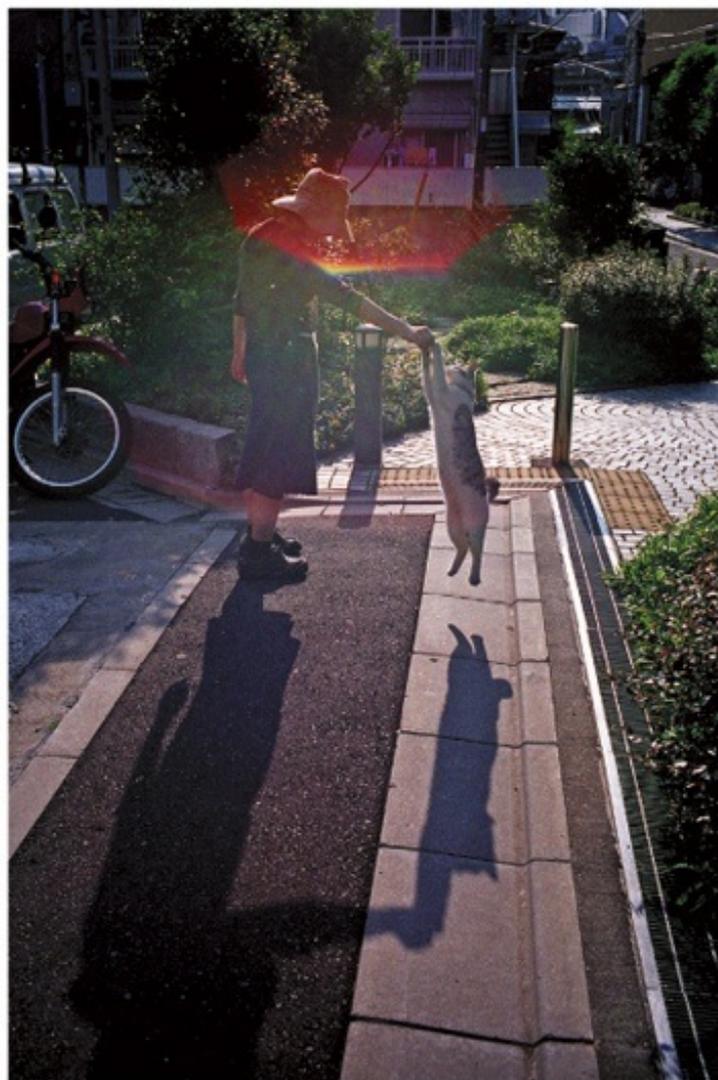
そう問いかける若者に、

「……贅肉が増えたくらいだな」

と、主人公の返答。伊坂幸太郎氏の小説「死神の精度」の中のくだりである。この作品は昨年映画化されたが、主役を演じた俳優は僕と同じ歳で、長年スクリーンで彼を観続けてきた僕はその時、「歳とつたなあ……」としみじみ思った。彼を——というか正確には彼の背中を見て。衣装越しにもその背中と腰回りは、脂肪と贅肉で少々ダブつき始めているのが見て取れた。人は背中で（より正確には腰回りで）歳を取る——期せずして、そんなことを実感してしまった。

評論家の亀井勝一郎氏が、著書「大和古寺風物詩」の中で言うところの「後ろ姿」で人生や人間を語ることなど、僕には到底できないけれど、「年齢は背中贅肉にこそ現れる」という事実については、断言できる。

そう、お腹ではなく背中なんです。前の出っ張りは凹まして誤魔化せても、後ろは……なるほど「全自己」とまでは言わずとも、日々の暮らしぶりのかなりの部分が、現れちゃうのである。



私が猫と戯れているとき、ひょっとすると猫のほうが、  
私を相手に遊んでいるのではないだろうか。

モンテーニュ (1533 - 1592)  
(哲学者 (仏) / 「エッセー」)



Love & Peace!

猫の写真を撮るようになって、かれこれ二年ほどになる。始めた当初は、「どうして猫？」と色々な人から言われた。「単にブームに便乗しようとしているだけでしょ」などと言われることもあった。

確かに自分は、いわゆる世間一般の「猫好き」ではないと思う。むしろそれまでずっと撮り続けてきた街角スナップの片隅に、登場人物として猫がいる——そんなスタンスだった。今でもそれは変わらないけれど、ある時ふと、気づいたことがある。

それは、猫がのんびりと遊んだり昼寝したりできる街角や路地裏は、すごく平和で穏やかな場所が多い、ということだ。

車通りが少なく、縁の下や軒先にいかにも猫が好みそうな「隙間」がたくさんあり、夕方になればおじいさんが夕涼みをしたり、学校帰りの子どもが玄関口にランドセルを放り投げて「夕飯までに帰ってくるのよ！」なんて声を背に駆け出したりする——そんな街だ。

猫が平和に暮らせる土地は、人々の時間の流れもほんの少しゆったりしていて、そこに暮らす人の心も、とかく迷惑がられる野良猫さえ受け入れてしまう大らかさみたいなものが、心なしかある。

猫に教えられることって、意外に多いのだ。



Love & Peace! 巻頭言



人は人  
吾<sup>われ</sup>はわれ<sup>なり</sup>也  
とにかくに  
吾<sup>わ</sup>が行く道を  
吾は行くなり

西田幾多郎 (1870 - 1945)  
(哲学者〈日本〉 / 「遺墨集」)



Love & Peace!

先月号で「太宰治語録」を紹介したところ、ある人から「どの言葉が一番好きか」と訊ねられた。かの文豪の自虐的な文言は、いずれも折々の精神状態によって心に響く部分は異なるが、あえて一つを挙げるとするならば――  
「多くの場合、人は、いつのまにか、ちがう野原を歩いている」という一文かもしれない。

かつて描いた若き夢、未来像。翻ひるがえって現在の自分自身のありよう。その両者を見比べ、独り愕然とする――そんな思いは、誰しも経験があるのではないだろうか。かく言う私も、その例外ではない。

一体全体、いつどこで、この道は逸よれてしまったのだろうか……だけど、その分岐点は、後になって振り返れば「ああ、あの時だ」と認識できても、その時の瞬間にわかる人は、きつと、ものすごく少ない。

そうして人は、知らぬ間に「ちがう野原」を歩いている。

けれども、結局はそれもまた、自らが選んだ道なのだろう。様々な外部因子によって、今の道を進まざるをえなかったのだとしても、つまるところそれを選んだのは、自分自身に他ならない。

とかく隣人を眺めやれば、羨望や嫉妬の念も沸き立とうものだけれど、「とにかくに 吾が行く道を 吾は行く」より、他にない。



Love & Peace! 巻頭言



どんなものを食べているか  
言ってみたまえ。  
君がどんな人であるかを  
言いあててみせよう。

ジャン・アンテルム・ブリア=サヴァラン (1755 - 1826)  
法律家 (フランス) / 「美味礼賛」



Love & Peace!

同じようなニュアンスの言葉を、アメリカで聞いたことがある。

かれこれ一〇数年前、初めて同国を訪れた時のこと。カリフォルニア州サクラメントの市場を散策していた時、オーガニックのリンゴを売っていたヒッピーくずれの青年が言った言葉だ。

—— You are what you eat ——

直訳すれば、「貴方とは、貴方の食べたもののこと」。

一九六〇年代、アメリカ西海岸を発信源としたカウンターカルチャーから、七〇〜八〇年代のニューエイジムーヴメントへと展開したいわゆる「人間性回復運動」が、その後どのように食と農のオーガニックムーヴメントへと発展進化していったのか、その軌跡を辿る旅だった。

様々な場所に赴き、あらゆる人種、属性の人々の話を聞き、情報過多で脳味噌がもうパンクしそう——という時に、農家の兄ちゃんが教えてくれたこの言葉に、真実に似たものを感じ取った。

—— 貴方とは、貴方の食べたもののこと。

よく似ている。

—— どんなものを食べているか言ってみたまえ。君がどんな人であるかを言いあててみせよう。

さて、年の瀬も迫るこの時期、飲み会、宴会、コンパにパーティーと、手帳に空白の見当たらない御仁も多いことだろう。ビールに焼酎、ワインにボン酒、はたまたピンクのドンペリで、テンション高めに杯を掲げるその一瞬、ふとサヴァランの言葉を思い起こすことは、果たして貴方の宴席に水を差すだろうか。

  
Love & Peace! 巻頭言



人の一生は重荷を負ふて  
遠き道を往くがごとし  
急ぐべからず

徳川家康 (1542 - 1616)  
武将 (日本) / 「遺訓」



Love & Peace!

好きか嫌いかでいうなら、徳川家康という武将は、嫌いである。歴史上この老人がこの国にもたらした大いなる弊害を見れば、「大嫌い」といってもよい。

が、そんな人物にも、学ぶべきことはある。

元々は人付き合いの苦手な、非常な嫌人家であったと思われるこの老人が、関ヶ原以前、ある時を境に突然他者に頭を下げ、にこやかに振る舞い始める。周囲の大名たちは、「あのケチくさい爺いがか何か下心を持ち始めたぞ」と後ろ指をさしつつも、頭を下げて嫌な思いをする者は少なく、徐々に気を許していく。

人一倍自尊心が強く人嫌いであったこの老人が、他者に頭を下げ、追従し、へらへらと笑い振る舞うのは、極めて忍耐力を要する行動だったろう。

しかしそれによって、結果的に彼は「天下」を取ることになる。

誰しも虫の好かない人間はいるものだ。そういう相手に微笑みかけ、あまつさえ頭を下げるなどというのは、屈辱以外の何物でもない。

けれども、それに拘泥し意地を張り続けるのは、矮小な自尊心を満たすちっぼけな満足心に過ぎない。

ふんつとそっぽを向いてしまいか、にこにここと笑い挨拶の一つでもしてみせるか——できることなら、後者の度量を持ち得たいものである。



自分のつらが曲がっているに、  
鏡を賣めて何になる

ゴゴリー (1809 - 1852)  
作家 (ロシア) / 「検察官」



Love & Peace!

他者というのは、つくづく自分の心を反射する「鏡」だと思う。

『真田太平記』(池波正太郎著)の中に、こんな場面がある。若き真田幸村が、女忍びのお江に「あれほど親しかった兄(真田信幸)との関係が最近気まずい」と打ち明けるくだり。お江はこう説く。「それは貴方自身の心の中に、相手への疑心や後ろめたさがあるからです。他者は自身の心を映す鏡なのです」

なるほどその通りだと思うのは、苦手な相手や嫌いな人間が発する、あの厭な「気」に触れた時である。実はそれは、相手が発するものではなく、こちらが抱く悪感情が、相手という鏡に反射し投影されているだけなのかもしれない。

私たちが他者を責めようとする時、結局のところそれは、自身の内に宿る歪んだ心——つまりは「自分の曲がったつら」を責めているだけなのかもしれない。

他者は、我が心を映す鏡。

しかし、どうにもこの鏡が厄介なのは、こちら側の「好意」に対しては、必ずしも正確に反射、投影してくれるとは限らない——ということだろうか。

Love & Peace! 巻頭言



春眠 暁を覚えず

孟浩然 (689 - 740)  
詩人 (中国) / 「春暁」



Love &amp; Peace!

春眠 曉を覚えず

処処 啼鳥を聞く

夜来 風雨の声

花落つること知んぬ多少ぞ

中国・唐代の詩人、孟浩然の有名な一首である。

「春の眠りの心地よさに、夜が明けたことさえ知らなかった。あちらこちらで啼く鳥の声に目を覚ます。夕べから雨風の音はやむことがない。風に吹かれ雨に打たれた花はどれほど散っただろうか」

「春曉」はこれまで千年以上にわたって、季節の移ろいを詠った秀作と見なされてきた。ところが、漢文学者の莊魯迅氏はその解釈に異を唱える。単なる季節の移ろいを詠った歌ではなく、孟浩然がその生涯でたった一度だけ、身も心も捧げた女性・小真娘との別離の朝に詠んだ歌である、と。

「絶え間ない鳥の鳴き声に、ふと目を覚ます浩然。かたわらに眠る小真娘。昨夜からの風と雨の音は、今まさに春が過ぎゆくようとしていることを告げる。長い人生の中の、ほんの一瞬に過ぎない愛の悦びから目醒めた詩人は、「春曉」を遺して再び旅に出る——」（『物語・唐の反骨三詩人』集英社）

孟浩然と小真娘の恋については謎多き史実とされているが、一説には「春曉」を詠んだ三年後に小真娘は病に倒れ、二〇歳の若さで逝去したという。そしてその七年後、孟浩然も世を去る。

「遑遑たる三十載、書劍は両に成る無し」

これは、孟浩然が三十代半ばの時に詠んだ句だ。

「三十年余も人生をさまよってきたが、文学家としても政治家としても自分は何一つ成果をあげることができない」

自身の非力をそう嘆く。唐代を代表する詩人の、余人あずかり知らぬ苦悩の様が、どうにも身につまされる暮春である。

Love & Peace! 巻頭言



そもそも手が機械と異なる点は、  
それがいつも直接に  
心と繋がれていることでもあります。

柳宗悦 (1889 ~ 1961)  
美術評論家 (日本) / 「手仕事の日本」



Love & Peace!

怪我をしたり病気になったりした時に処置を施すことを、「手当て」というけれど、この言葉、単なる比喩ではないんだなあと思うことが、しばしばある。

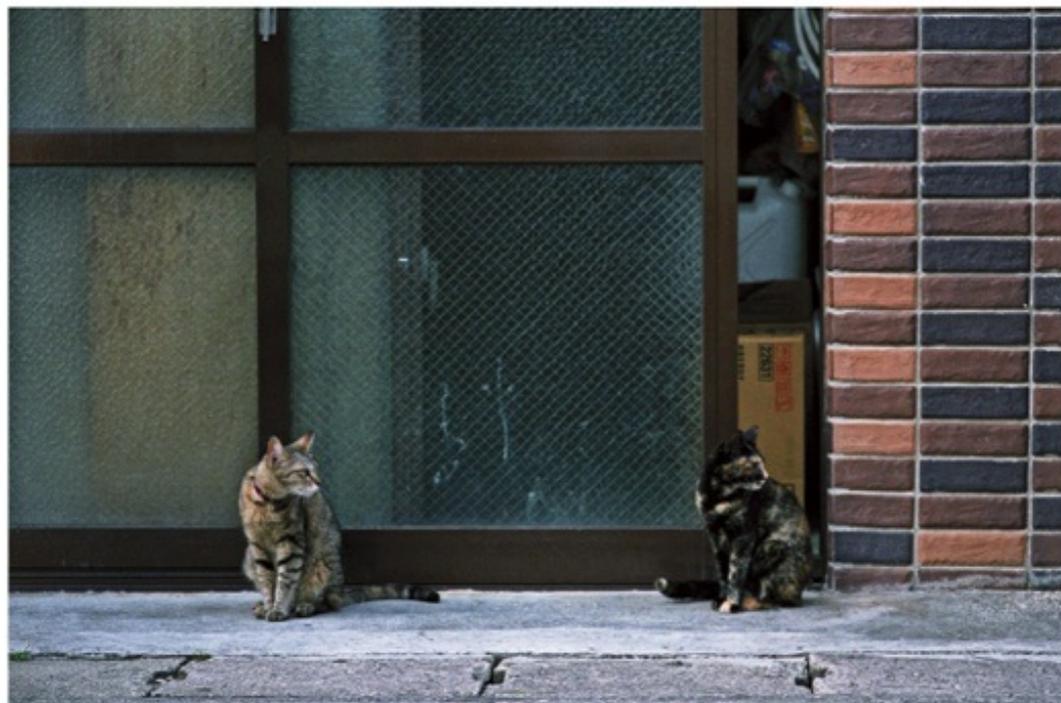
たとえばお腹が痛い時、その箇所の手を平をそっと当てておくと、不思議と楽になったりする。薬も効かないようなひどい頭痛の時、静かに額をさすってもらうと、痛みが一時、引くことがある。

どんな名医の治療も、最新医療の投薬も、手の平一つにかなわないことであるのだ。怪しげな気功術だのハンドパワーだのといった例を引かずとも、太古の昔から、人の手には相応の力が宿っていたのだろう。

「手当て」とは、文字通り「手を当てる」こと。

ただしこの手、誰のでもオツケー、といったものでもない。

親身になって気遣い、いたわってくれる心の持ち主。その人が差し出す手。そうした心の込もった手の平にこそ、力は宿るのだろう。



愛する——それはお互いを見つめ合うことではなくて、  
いっしょに同じ方向を見つめることである。

サン・テグジュペリ (1900～1944)  
作家 (フランス) / 『人間の土地』



Love & Peace!

もちろん言うまでもなく、愛のかたちは人それぞれ。他人がとやかく言う筋合いのものではない。

それにしても、である。男と女の間のそれに限って云うならば、なるほどサン・テグジュペリのこの言葉は、男女間の時の経過をも含め、正鵠を射ているようにも思える。

すなわち、互いのことを一心に見つめ合う段階を「恋」とするならば、「愛」とはともに寄り添って、同じものを見つめていくこと——なのかもしれない。

ということとは、だ。恋だの愛だのといったものは、所詮は変容する類のものである、とも云えるだろうか。

さて、それでは、恋から愛を経たのち、果たしてそれは次に、一体何へと変わっていくのだろうか。